

「生きる喜び」

福岡県 大沢愛

祖父が、病との戦いを終えてから、一年が経ちました。この一年の間、私はある悩みで頭の中がいっぱいでした。

祖父は、筋萎縮性側索硬化症という病気を患っていました。この病気は、徐々に全身の筋肉が落ちていき、最終的には自力での呼吸すら困難になる難病で、治療法も見つかっていません。病状が進行した祖父は、ある日ついに、一つの決断を迫られました。それは、「人工呼吸器による延命をするかどうか。」 延命することは、生きられる期間が伸びるかわりに、患者には大きな苦痛を伴います。それでも祖父は、私にほほえみながら、「生きたい。まだ愛ちゃんに会いたい。苦しくてもいいんだ」と言い延命することを決めました。この言葉に、私は本当に感動して、祖父が苦しい時は私が支えよう、そして一緒の時間を大切に過ごそう、と心に決めました。

呼吸器をつけた祖父は、一時期より体調もよくなり、楽しい日が続きました。「おじいちゃん、延命してよかったね。ずっとこのままならいいね。」私が言うと、祖父もにっこり笑いました。しかし、四ヶ月が過ぎた頃から、祖父の容態は急に悪化し、毎日とても苦しそうになりました。そんな祖父を見て、私は延命をとめておけばよかったのかもしれない、と思うようになりました。そして祖父は一進一退で病と激しく戦いましたが、容態悪化から二週間後、穏やかに戦いを終えました。私はお疲れ様、としか言うことができませんでした。

それからというもの、私は毎日、祖父は延命してよかったのか、ということばかり考えていました。苦しげな祖父の顔を思い出しては、思い悩んでいたある日、私は近所で、よく祖父のお世話をしてくれていた看護師さんに会いました。そこで私がずっと悩んでいた話をすると、優しい顔でこう教えてくれました。「おじいちゃんは、いつも、たとえ体調が悪い時でも、今日も生きていられて幸せだ、って言ってたよ。だから悩む必要はないよ。」この一言で、私の心の霧が晴れました。祖父にとって、延命は生きる喜びを少しでも長く与えてくれたのでした。私は、目に熱いものをためながら、私も祖父のように生きている喜びを感じながら、一日一日を大切に過ごしていこう、と、青空を見上げ、誓いました。